平成１８年度

第３８回　越谷市民文化祭

平成１８年１１月２３日（木）～２６日（日）

１０：００～１９：００（最終日は１８：００）

越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　大ホールホワイエ

◇周りの１０個の輪は、昭和２９年１１月３日に合併した十町村である二町八ケ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。
十町村とは、越ケ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を４個集めたもの。
つまり、越谷の『越』（「コ４」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

◇昭和３０年１１月３日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、麦塚、上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和３３年１１月３日に市に昇格し、越谷市となる。

第38回 市民文化祭

郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
1	旧瓦曽根・登戸・蒲生村の石仏	1～11	加藤　幸一	春日部市大枝
2	越ケ谷・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠	12	木原　徹也	野田市中根
3	謎の絵師「写楽」と三野宮の法光寺	13・14	菅波　昌夫	南越谷一丁目
4	大沢の七ツ池	15・16	髙崎　力	平方
5	市内、西新井の「椿割り塚」の由来	17	田村のぶ子	西新井
6	越谷吾山と越谷の方言	18・19	増岡　武司	東越谷七丁目
7	日光街道に鉄道馬車が走った	20・21	三浦　栄市	北越谷一丁目
8	増林の横井堀・掘削残土採集記 ――飛鳥・平安から中世・近世に至る遺物――	22	山本　泰秀	増林二丁目

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、
ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会の宮川　進（当会会長・☎及びFAX９７５－９１３９）
までお願いします。

1　旧瓦曽根・登戸・蒲生村の石仏

加藤幸一

今回は、旧瓦曽根・登戸・蒲生村の江戸期の石仏・石塔について調査をおこなった。調査の詳細な記録については、照蓮院や神社、光明院、地蔵院に資料を置かせていただくのでご請求（無料）願いたい。

なお、平成五年から開始した他地区の石仏調査記録については、西方の大聖寺内にある資料室（見学無料）にご厚意により保管させていただいているので、ご覧願いたい。また、越谷市立図書館二階にても閲覧できる。

旧瓦曽根村

（1）瓦曽根の稲荷神社

瓦曽根の「瓦」とは、元荒川（昔の荒川本流）の河原をさすと思われる。元荒川の土手際にある稲荷神社は、江戸時代は村の鎮守であった。そこには図1の水神様の石塔がある。

また神社の裏塀に図2の道しるべの石塔がある。正面には「江戸」、右側面には、「のた」（野田）、ほふしばな（宝珠花）の地名が刻まれている。

（2）照蓮院

照蓮院は、足立区の西新井大師から始まる八十八箇所巡礼の第二十五番である。図3は、弘法大師像が載った石塔である。台石には「廿五番新四国八十八箇所」の文字が見られる。

図5は、秋山家墓所にある「千徳丸」の五輪塔である。戦国時代のこと、天目山の戦いで敗れて武田勝頼が自刃する。武田家没落後、秋山長慶は遺児千徳丸を連れて落ち延びてきたが、幼君千徳丸は、若くして亡くなる。

五輪塔は、下から方形（四角形）、円形、三角形、半円、宝珠形の順番に積み上げ、それぞれを地輪、水輪、火輪、風輪、空輪と呼んでいる。密教では、宇宙のあらゆる物質は地・水・火・風・空の五つから成り立っているとしている。

（3）旧「最勝院」の観音堂跡地

江戸時代、この地には最勝院があった。照蓮院の末寺である。最勝院の名残である観音堂は、平成三年に取り壊されたが、ここには現在も図7の庚申塔がある。

旧登戸村の石仏

（1）南越谷駅そば日光街道路傍

このあたりは「三軒家」（南越谷二丁目近辺）と呼ばれた地域である。南東には、登戸村の本村「登戸本田」（登戸町近辺）、南西には、登戸の村人の新田開発によって生まれた「登戸新田」（南越谷五丁目周辺）がある。

図1は、馬頭観音像を乗せた石塔である。越谷宿や大沢宿の馬借の下役人たちが奉納したのである。

（2）登戸の稲荷神社

江戸時代は、登戸村の鎮守であった。ここに図2の「□□金龍」と刻まれた庚申塔がある。上部には、太陽と月が、下部には見猿、聞か猿、言わ猿の三猿が見られる。

（3）宮前通りと八潮越谷線の交差点

宮前通りの「宮」とは、登戸の稲荷神社をさしている。ここに図3の庚申塔がある。台石には、「是より大相模（の不動尊への）道、是より日光道中、越ケ谷（に通じる）」という意味の道しるべが刻まれている。

（4）報土院

昔から薬師堂（境内）と地蔵堂（境内の外）の二つのお堂がある。また、最近になって丸彫りの羅漢像が境内にみられ、報土院の名所の一つになりつつある。

図4は、この寺の中興開山をした善教大和尚の供養塔である。天正十年（一五八二）に亡くなられている。

図5は、四国八十八箇所、西国三十三箇所、秩父三十四箇所、坂東三十三箇所をすべて巡礼した記念に建てた非常に大きな石塔である。

（5）浜野家（登戸二六－四〇）西側路傍

図11は、文字庚申塔である。側面には、指し示す指の絵が描かれて「ふどう道」と刻まれている。大相模の不動尊に行く道である。

（6）七左一の橋

このあたりは登戸村の人々が開発した「登戸新田」（南越谷五丁目周辺）と呼ばれた地域である。屋号が「庚申さん」と呼ばれた堀須家が管理してきた図12の庚申塔がある。

旧蒲生村の石仏

（1）蒲生交流館そば路傍

図1の石塔は、宝暦七年（一七五七）に日光街道の大補修工事が行われたが、その記念として、蒲生の石仏9番の「ぎょうだい様」とともに造立されたものである。

（2）植竹家（蒲生三－六－一三）路傍

図2は、庚申塔である。院が六本もある青面金剛の他に、太陽と月、二羽の鶏、鬼、三猿が刻まれている。

（3）植竹家（蒲生三－一六－四）邸内

図3は、道しるべの石塔である。「是ヨリ左、大さかみ道」と刻まれている。もとは、大相模の不動尊（西方の大聖寺）へ通じる道（植竹家の西側の道路）の路傍にあった。

（4）蒲生の光明院

光明院は、足立区の西新井大師から始まる八十八箇所巡礼の第十五番である。ここに、その八十八箇所の寺院すべてを刻んだ当時の貴重な石塔（巡拝供養塔）がある。明治三十六年（一九〇三）の造立である。

図5は、馬頭観音像である。頭上に馬の頭が乗り、顔が三面あって、腕が六本ある仏様として描かれている。墓地の北東端にある無縁仏群の中にある。

（5）光明院の閻魔堂

図6は、金仏供養塔である。

（6）茶屋通り神谷家（蒲生一－五）路傍

図8は、不動明王像を載せた道しるべの石塔で、「是より大さかみ道」と刻まれている。大相模の不動尊にいく不動道は、この石塔のある地点から始まり、蒲生の光明院の前を通って北上し、稲荷神社（地元では、「宮稲荷」とも呼ばれた）の西側を通って、現在の県道柿ノ木・蒲生線を越えて北上し、突き当たりの関根家（登戸一九－二〇）で北東に進み、登戸の稲荷神社の裏側を通って大相模の不動尊へと通じる道である。

（7）茶屋通り薬師堂小道具倉庫前路傍

図9は、地元では「ぎょうだい様」と呼ばれている砂利道供養塔である。上部には、得たいの知れない動物の頭部が丸彫りで祀られている。地元では、この石仏を「おかま様」「行者様」とも称してきた。その正体は今もって不明である。宝暦七年（一七五七）に日光街道の大補修工事が施工されたが、その記念として、蒲生の石仏1番の石塔とともに造立されたものである。

（8）武沢邸庭園（蒲生西町第一会館）

図11は、観音像を乗せた道しるべの石塔である。「これよりちおんじみち（慈願寺道）」と刻まれ、観音像は慈願寺の本尊を意味している。現在の土手道あたりが、当時の慈願寺に通じる岩槻道であった。

（9）一里塚跡の愛宕神社

地元では、昔から「一里山」と呼ばれ、江戸時代の一里塚があった所である。ここに愛宕神社が祀られている。

図13は、故田山にいくための道しるべの石塔である。八条（現在の八潮市あたり）や流山の地名も見られる。

（10）道沼の八幡神社

ここには、庚申塔が二基ほどあるが、図19の青面金剛（庚申様）は三つ目となっている。

（11）道沼の「賢」（共同墓地）

図20は、秋迎如来像が線刻で描かれている江戸時代初期の石仏である。

（12）久伊豆神社（村社）東方の路傍

図22は、道しるべの石塔である。故田山、横新田（草加市八潮）などの地名が見られる。

（13）久伊豆神社（村社）

江戸時代には蒲生の光明院持ちで、蒲生村の鎮守であった。「村社」とも呼ばれている。

図23は、庚申塔である。

（14）久伊豆神社（村社）そば路傍

図24は、岩槻道の路傍にある道しるべの石塔である。「これより、右、慈願寺道」と刻まれている。岩槻道は慈願寺にも通じる道である。また、その隣には「左、かちさも」と刻まれている。徒歩の道（陸路）という意味であろう。当時は、馬などが使えず、徒歩でないと通れない細い道であったのであろう。

（15）久伊豆神社（小鶴様）

江戸時代は、村民（蒲生村西組、現在の蒲生西町あたり）持ちであった。蒲生村の鎮守様（村社、鎮守様）に対して、西組の久伊豆社は小鶴様と呼ばれている。

図25と26は、どちらも庚申塔である。

（16）西蒲城東詰

図28と29は、どちらも馬頭観音の石仏である。ここは、蒲生村のはずれにあり、かつての馬捨て場であったと思われる。

（17）高橋家（蒲生西町二－六－七）路傍

図30は、主にかまどの神として信仰されてきた荒神の石塔である。

（18）地蔵院の浸禁堂（納骨堂）

ここは、昔からの地蔵院様の土地である。浸禁堂が建立された時に出土した石仏が図31で、江戸時代初期の造立である。

（19）地蔵院

地蔵院は、蒲生村西組の名主、中野家（蒲生西町一－五－二二）の先祖によって開基されたと伝えられる。

図32は、北を向いた「北向き地蔵」である。図33のその1から6は、六体の地蔵である。中野家の先祖が造立したものである。六角堂に背中合わせになって安置されている。

（20）清蔵院そばの久伊豆神社

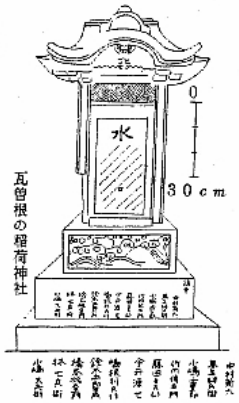
江戸時代は、清蔵院持ちであった。現在は、後見家（蒲生西町一－六－二二）が土地を所有し、管理している。ここに庚申塔（図35）が一基ほどある。

（21）天神社（蒲生本町公会堂）

ここにも摩耗が激しい庚申塔（図36）が一基ほどある。

旧瓦曽根村

瓦曽根 1・「水神宮」文字塔



瓦曽根の稲荷神社

瓦曽根 2・道標石塔

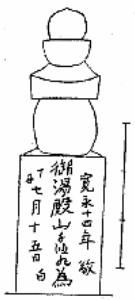
瓦曽根 3・弘法大師像付き一千年御遠忌供養塔

照蓮院

瓦曽根 4・如意輪観音菩薩像

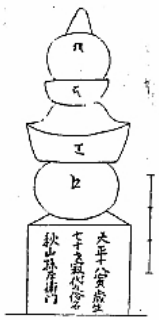
照蓮院

瓦曽根 5・千徳丸供養塔



照蓮院

瓦曽根 6・秋山長慶の子の供養塔



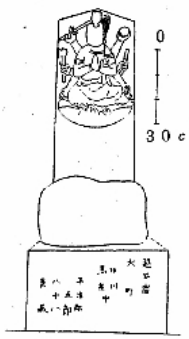
照蓮院

瓦曽根 7・青面金剛像庚申塔

旧「最勝院」の観音堂跡地

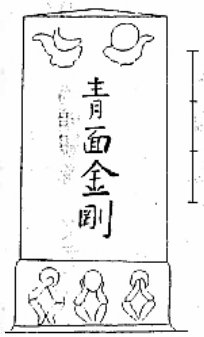
旧登戸村

登戸 1・馬頭観音像付き十九夜塔



南越谷駅そば日光街道路傍

登戸 2・文字庚申塔

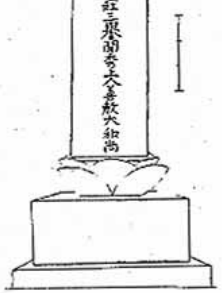


登戸の稲荷神社

登戸 3・道標付き文字庚申塔

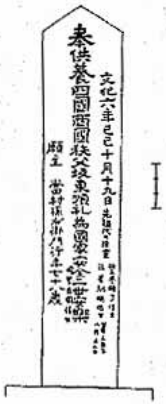
宮前通りと八潮越谷線の交差点

登戸 4・開山塔



報土院

登戸 5・百八十八箇所巡礼塔

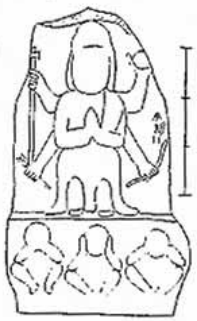


報土院

登戸 6・青面金剛像庚申塔

報土院

登戸 7・青面金剛像庚申塔

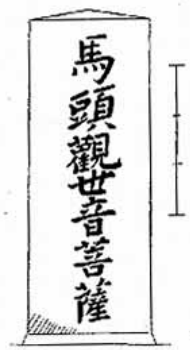


報土院

登戸 8・馬頭観音像

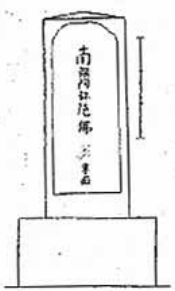
報土院

登戸 9・「馬頭観音」文字塔



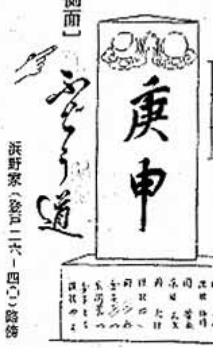
報土院

登戸 10・名号塔



報土院

登戸 11・道標付き文字庚申塔



浜野家（登戸二六－四〇）路傍

旧蒲生村

蒲生 1. 道路寄付標識石塔
蒲生交流館そば路傍

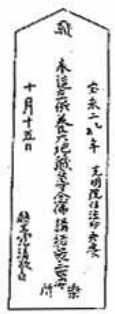
蒲生 2. 青面金剛像庚申塔
横竹家（蒲生三―一六―一三）路傍

蒲生 3. 道標石塔
横竹家（場所三―一六―一四）部内

蒲生 4. 観音菩薩像墓塔
蒲生の光明院

蒲生 5. 馬頭観音像
蒲生の光明院

蒲生 6. 六地蔵念仏供養塔
光明院の開闇堂

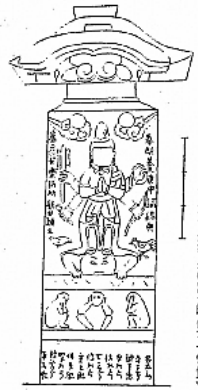


蒲生 7. 青面金剛像庚申塔
茶屋通り神谷家（蒲生一―五―一）路傍

蒲生 8. 不動明王像付き道標
茶屋通り神谷家（蒲生一―五―一）路傍

蒲生 9. 砂利道供養塔『ぎょうだい様』
茶屋通り藤波小道具倉庫前の路傍

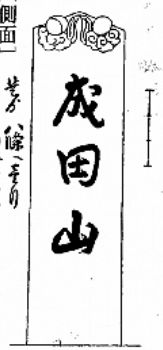
蒲生 10. 青面金剛像庚申塔
虚空蔵堂（蒲生愛宕町第二会館）



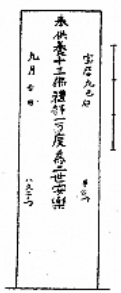
蒲生 11. 観音像付き道標石塔
虚空蔵堂（蒲生愛宕町第二会館）

蒲生 12. 「塞神（さえのかみ）」文字塔
虚空蔵堂（蒲生愛宕町第二会館）

蒲生 13. 道標石塔
一里塚跡の愛宕神社



蒲生 14. 十三仏供養塔
一里塚跡の愛宕神社

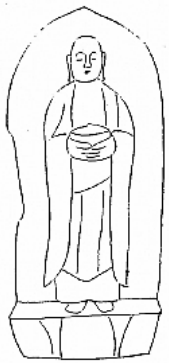


蒲生 15. 不動明王像
一里塚跡の愛宕神社

蒲生 16. 六体の六地蔵菩薩像（その1）
一里塚跡の愛宕神社

16. 六体の六地蔵菩薩像（その2）
一里塚跡の愛宕神社

16. 六体の六地蔵菩薩像（その3）
一里塚跡の愛宕神社



16. 六体の六地蔵菩薩像（その4）
一里塚跡の愛宕神社

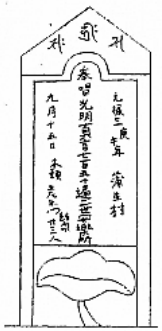
21. 地蔵菩薩像
道沼の寮

22. 道標石塔
久伊豆神社（村社）東方の路傍

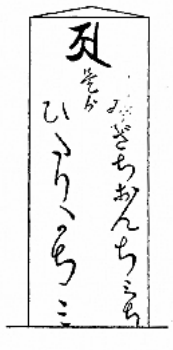
23. 青面金剛像庚申塔
久伊豆神社（村社）

16. 六体の六地蔵菩薩像（その5）
一里塚跡の愛宕神社

16. 六体の六地蔵菩薩像（その6）
一里塚跡の愛宕神社



17. 光明真言供養塔
一里塚跡の愛宕神社



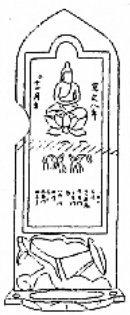
24. 道標石塔
久伊豆神社（村社）そばの路傍

25. 青面金剛像庚申塔
久伊豆神社（小鎮）

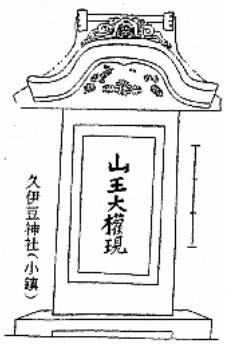
26. 文字庚申塔
久伊豆神社（小鎮）

18. 青面金剛像庚申塔
道沼の八幡神社

19. 青面金剛像庚申塔
道沼の八幡神社

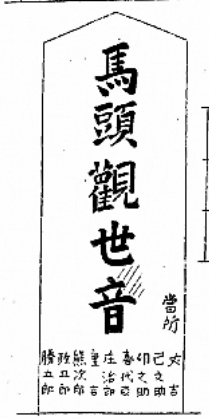


20. 釈迦如来像
道沼の寮



27. 「山王権現」文字塔
久伊豆神社（小鎮）

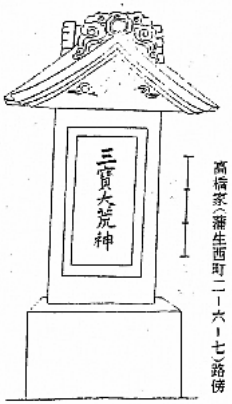
28. 馬頭観音像
西浦橋東詰



29. 「馬頭観音」文字塔
西浦橋東詰

滝生 30. 「三宝荒神」（さんぼうこうじん）文字塔

高橋家（滝生西町二一六―七）路傍



滝生 31. 如意輪観音像

地蔵院の涅槃堂

滝生 32. 『北向き地蔵』石仏

地蔵院

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その1）

地蔵院の六角堂

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その2）

地蔵院の六角堂

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その3）

地蔵院の六角堂

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その4）

地蔵院の六角堂

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その5）

地蔵院の六角堂

滝生 33. 六角堂の六地蔵菩薩像（その6）

地蔵院の六角堂

滝生 34. 西組・中野家初代の墓塔

地蔵院の中野家個人墓地

滝生 36. 青面金剛像庚申塔

天神社（滝生本町公会堂）

［参考］中野家の宝篋印塔

地蔵院

滝生 35. 文字庚申塔

滝蔵院そばの久伊豆神社

蒲生地区の石仏案内図

越ケ谷町
越谷駅
日光街道
しらこばと橋
元荒川
大聖寺
瓦曽根沼井
瓦曽根村
(1)瓦曽根の稲荷神社
(2)無漏院
(3)旧「最勝院」の観音堂跡地
登戸村
①南越谷駅そば日光街道路傍
②登戸の稲荷神社
③宮前通りと八潮越谷線の交差点
④報土院
⑤浜野家(登戸26-40)
⑥七左一の橋
弁天社
西方村
蒲生村
(1)蒲生交流館そば路傍
(2)植竹家(蒲生3-16-13)
(3)植竹家(蒲生3-16-14)
(4)蒲生の光明院
(5)光明院の閻魔堂
(6)茶屋通り神谷家(蒲生1-5)路傍
(7)茶屋通り奥波小濱其倉庫前路傍
(8)虚空蔵堂(蒲生愛宕町第二会館)
(9)一里塚の愛宕神社
(10)道沼の八幡神社
(11)道沼の宗
(12)久伊豆神社(村社)東方
(13)久伊豆神社(村社)
(14)久伊豆神社(村社)そば路傍
(15)久伊豆神社(小鶴様)
(16)西浦橋東詰
(17)高橋家(蒲生西町2-6-7)路傍
(18)地蔵院の湿地堂
(19)地蔵院
(20)清厳院そばの久伊豆神社
(21)天神社(蒲生本町公会堂)
南越谷駅
南越谷小
新越谷駅
七左衛門村
登戸新田
蒲生村
登戸村
宮前通り
登戸橋
西用水
出羽堀
七左一の橋
交番
蒲生交流館
蒲生駅
蒲生小
蒲生第二小
児童館ヒマワリ
古道(天神道)
県道越谷八潮線
大間野村
出羽橋
県道桐ノ木町蒲生線
天神橋
蒲生南小
阿弥陀堂墓地
西浦橋
古道(岩槻道)
綾瀬川
清厳院
(さんがた)
伊原村
古綾瀬川
金右衛門新田
新田駅
槐戸村
さいかちど

2　越ケ谷宿・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠

木原徹也

江戸時代の越ケ谷宿で質・古着商を営む内藤家は、屋号を「三鷹屋」と称した。この三鷹屋第八代当主の嘉兵衛は、天保二年（一八三一）、当時三十三歳で、家族構成は本人、母、妻の三人に、下男、下女の合わせて五人と馬一頭であり、持高は十五石八斗六升五合で、宿場内の主立ち商人であった。

嘉兵衛は、文政七年（一八二四）九月、眼病を患い、これが思わぬ大病となり、何人もの眼科医の治療を十二月まで受けることとなってしまった。この折、嘉兵衛は駒木村（現、千葉県流山市）の諏訪神社に眼病平癒を祈り、一〇ケ年の内に石燈籠を寄進する旨の心願を掛けた。

駒木村の諏訪神社とは、現在でも「駒木のお諏訪様」として親しまれ、例年八月二十二日、二十三日の例大祭には、大勢の参詣人が訪れる。

社伝によると、藤原氏との政争に敗れた高市皇子の後裔の者達が東国に流れ、大同二年（八〇七）、信濃国の諏訪神社の御分祠を現在地に鎮座したのが創建であると伝えている。

その後、後三年の役（永保三年、一〇八三）には、奥州に向かう八幡太郎義家が戦勝を祈願し、帰洛の途には、乗馬と馬具を奉献したとの伝説が残っている。江戸時代になると、多くの江戸町民が成田山詣での途中、諏訪神社に立ち寄るなど、近郷近在の庶民の信仰を集めた有名な神社である。

この諏訪神社に、眼病平癒を祈願した三鷹屋嘉兵衛は、七年後の天保二年（一八三一）に心願通りに石燈籠一対を寄進した。

石燈籠は、高さ九尺一寸（約二・八㍍）の小松上石造りで、代金は、十七両二朱（今の約二七〇万円相当）だった。

奉納供養には、別当成願寺への奉納金二両（約三二万円）をはじめ、関係する社僧への奉納や、石工・駕・茶屋など多数の関係人への祝儀など、石燈籠代金と合わせ総額二十四両三分と八十三文（約四〇〇万円）もの費用を掛けている。

この三鷹屋嘉兵衛が寄進した石燈籠については、かつて本間清利氏が『越谷の歴史物語第一集』で紹介しているが、なんとか現物を見たいものと、平成十八年八月に諏訪神社を訪れた。鬱蒼と樹木が生い茂り、長い歴史を思わせる参道を通り、正面社殿の外拝殿左右に建つ一対の大きな石燈籠が三鷹屋嘉兵衛の寄進した石燈籠だった。社殿に最も近い所に建てられ、大切に扱われている様子がうかがわれた。左右の石燈籠の基部には、「願主越谷宿　三鷹屋嘉兵衛」との文字が大きく刻まれ、社殿向かって右側の石燈籠には「天保二辛卯年　二月吉日」と「戸ケ崎　石工幸右ヱ門」と刻まれている。しかし、意外だったのは、左側の石燈籠の裏面に「大正三年五月廿三日　米村定八　再建」と刻まれている。良く観察すると、石の質や石の新旧が異なる所があるようにも見える。大正年間に全く新しく造りなおしたとは思えないが、後から何か手が入った様子は感じられた。それにしても、「米村定八」とは、どのような人であったのか、三鷹屋（内藤）嘉兵衛の親類の者なのだろうか。

社務所を尋ね、宮司さんに、この石燈籠について何か記録や言い伝えがあるかを伺ったが、残念ながら何も残っていないとのことで、これ以上の成果は得られなかった。

千葉県流山市内の著名な神社に残る一対の石燈籠から、江戸時代の越ケ谷人の信仰と活躍をしのぶことができた。

3　謎の絵師「写楽」と三野宮の法光寺

菅波昌夫

法光寺（越谷市三野宮一三三六番地）には、写楽の過去帳と平成十年に建てられた記念碑がある。法光寺は、元和三年（一六一七）に本願寺御堂の一院として江戸浅草横山町に創建された。明暦三年（一六五七）の振り袖火事により浅草御堂と共に焼失後、江戸築地に移転し、三百三十有余年間続く。越谷の現在地には、昭和六十三年（一九八八）に移り、平成五年に本堂が落成した。

写楽について触れた江戸時代の本に、江戸考証家斉藤月岑（げっしん）の「増補浮世絵類考」（天保五年、一八四四）がある。その中で「俗称、十郎兵衛、天明から寛政年中の人、江戸八丁堀に住す、阿波侯のお抱えの能役者也、号、東州斎」との記述を残している。

写楽は江戸中期の浮世絵師で、法光寺の過去帳には「辰三月七日　釈大乗院覚雲居士　八町堀地蔵橋　阿州殿御内　斉藤十郎兵衛事　行年五十八歳　千住ニテ火葬」と記されている。「辰」とは、文政三年（一八二〇）辰年のことであろう。阿州とは阿波徳島藩主蜂須賀侯が治める地である。

写楽は、寛政六年（一七九四）五月から翌年正月迄に上演された大歌舞伎狂言を取材して十カ月たらずの間に一四五枚の役者絵、相撲絵を集中的に描き残した。その後は、浮世絵界との関係を絶って消息が解らなくなる。そのために、写楽の出自については、今日、さまざまな説があらわれ、諸説紛々として、謎の浮世絵師としての関心が高まっていた。

作品数は研究者により異なるが、現在一四三から一四五枚現存している。作品は次のように四期に分かれる。

第一期　寛政六年五月　　二十八枚
江戸三座で上演された四つの芝居に取材したもの。全て大判の役者大首絵。

第二期　同年七月から八月　　三十八枚
八枚の大判と三十枚の細判全身像の役者絵

第三期　同年十一から十二月　　六十四枚
大判三枚、間判十四枚と全身像四十七枚

第四期　寛政七年正月から二月　十五枚
全身像十枚と相撲絵五枚

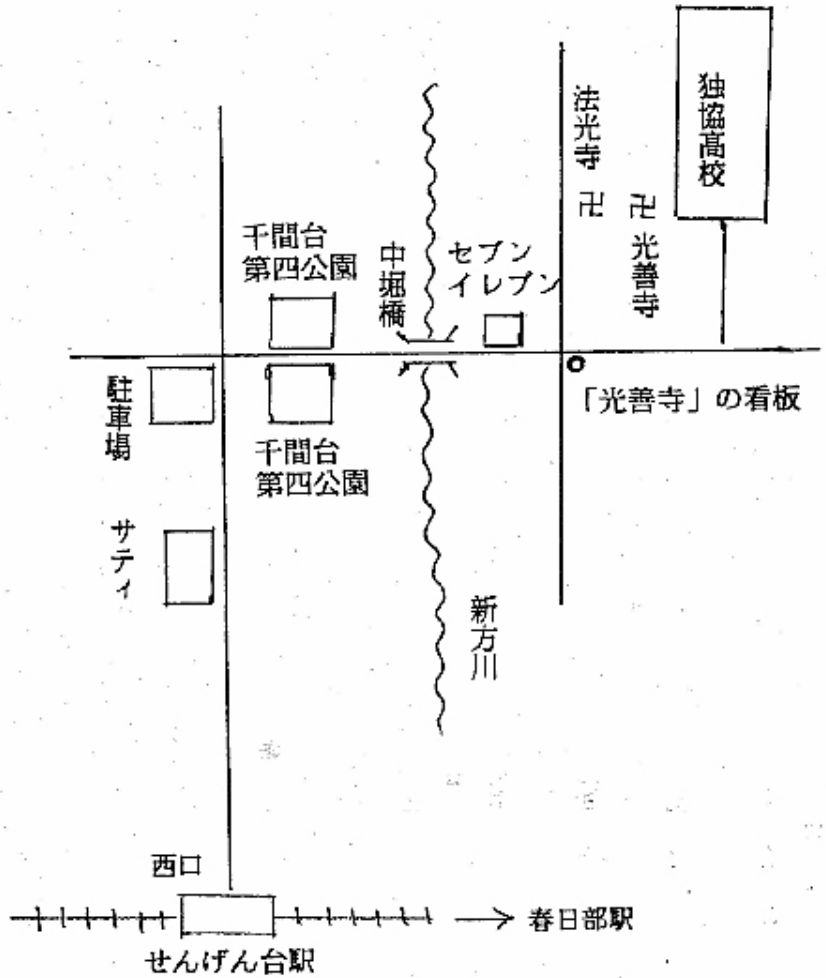
大首絵は一種のプロマイドで、写楽の歌舞伎役者を描いたものは、特に女性の人気を得た。これらの版元は、一代で江戸の大版元にのし上がった耕雲堂の蔦屋重三郎である。写楽の正体が不明のまま、四十八歳でこの世を去った。

写楽の作品は、美しさを理想とした描写では無く、妥協のない役者の心理と表情を揃え、今にも動き出しそうな画面一杯の大首絵が見られるのが特徴である。

参考文献　「能役者」（三一書房、内田千鶴子）、法光寺発行の解説書
「歴史読本」（昭和六十年十二月号、新人物往来社）

釋大恭院覺雲居士　辰三月七日

八町堀地蔵橋
阿州藩御用
齊藤十良兵衛妻
行年五十八歳子ども六人



4　大沢の七ツ池

高崎　力

昭和四十年代まで大沢には、内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・観音坊池・嘉右衛門池・しじみ池などがあり、通称「大沢の七ツ池」と呼んでいた。

現在地に移転する前の大沢小学校は、現在の市立第一体育館？あたりにあり、校庭東の崖下には、七ツ池最大の内池があった。そして常時、その池では川魚が捕られていた。今では珍しい菱の実もあった。江戸時代には、内池は大沢きっての土豪江沢家の宅地の一部で、その家屋は南岸の砂丘上にあった。現在、内池は埋め立てられ、第二体育館と大沢公民館になったが、公民館裏の曲道が内池の北岸であり、そこには川魚屋があった。

外池は、現在の大沢小学校の北裏の水田の位置にあった。浅間池・八郎兵衛池は、葛西用水路（逆さ川）対岸沿いにあって、かつては今はなき越谷紡績工場の従業員が昼休みになると魚釣りをしていた。現在では埋め立てられマンション等の住宅地になった。さらに葛西用水路に沿って観音坊池・嘉右衛門池・しじみ池と続いていた。現在では、これら七ツ池はすべて姿を消した。

内池　深さ一丈(3m)、東西三〇間(55m)、南北一八間(33m)、周囲二町二〇間(二五四m)

外池　深さ五尺(一・六m)、東西二三間(42m)、南北三〇間(55m)、周囲一町三〇間(一六四m)

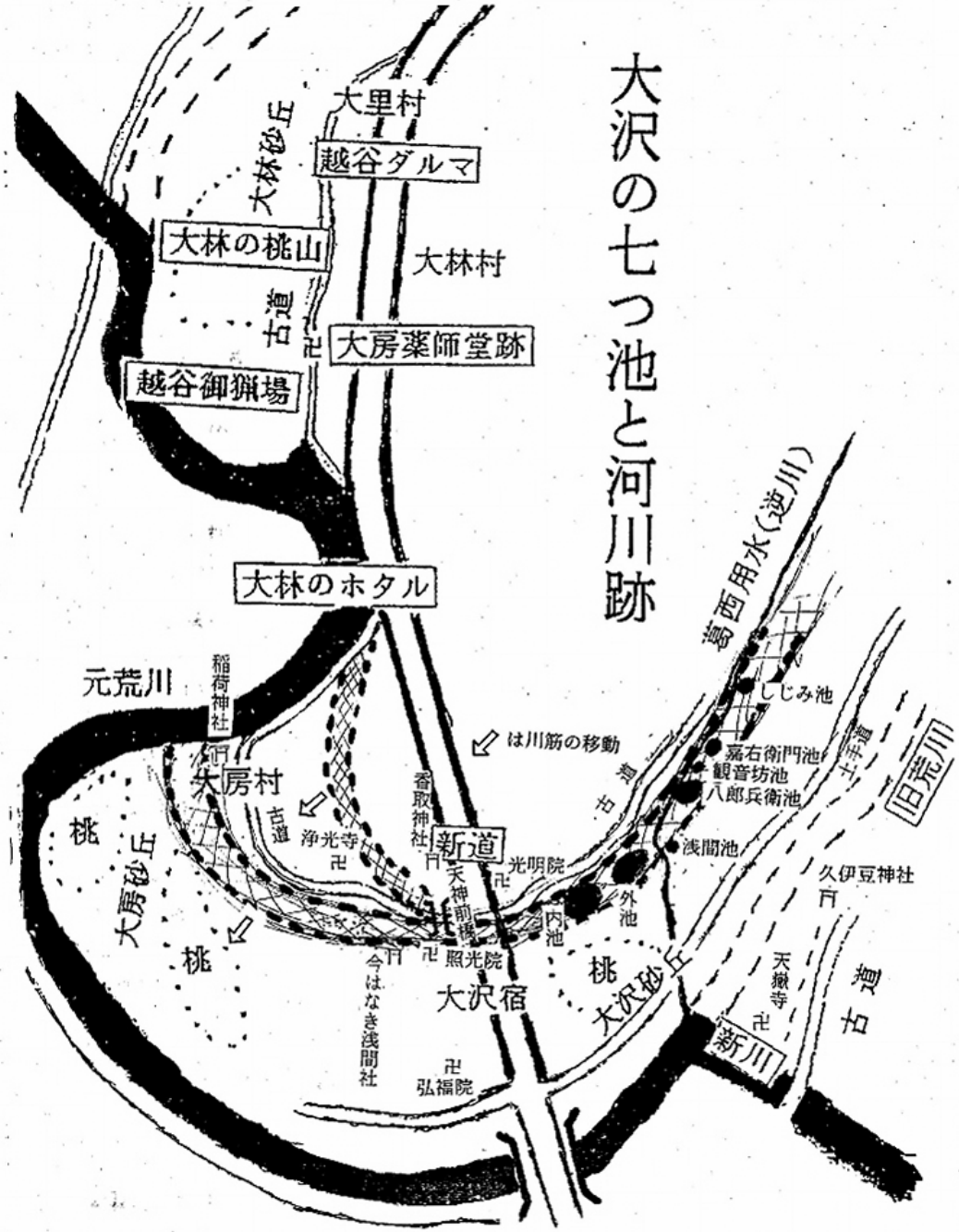
八郎兵衛池　深さ八尺(二・四m)、東西二一間(38m)、南北五二間(95m)、周囲二町十間(二三六m)

これらの七ツ池は、荒川の旧河道跡に沿ってあり、かつての荒川の名残といえる。この旧荒川は、大房・大沢の両地域のほぼ中央部を曲流し、北越谷駅の南側を通って七ツ池に続き、さらに葛西用水路沿いに流れ、花田で迂回し、花田の周りを天狗の鼻のように巡る荒川河跡に続いていたと思われる。

旧荒川の左岸は、北越谷駅ホームの南端で、光明院は左岸の方にあり、右岸には、自然堤防上に立つ照光院がある。少し離れた西方（東武線の西側）には今はなき大沢浅間社（現在の北越谷二丁目のドルチェ北越谷の地点）があった。川幅は約一〇〇m程であった。この川の澪（みお）と呼ばれた最も深い所が現在下水として使用されている。旧日光道で見ると、大沢三～一～二五の水角屋の南横の下水が澪跡で、大沢二丁目と三丁目の境界にもなっている。かつてこの部分の旧日光道には「天神前橋」があった。当時の川幅は九尺（3m弱）、橋の長さは一丈三尺（4m）で、多くの旅人や駅馬が渡っていたことであろう。

大沢浅間社の西側には大きな池（現在のマルサン駐車場を含む地域）があった。浅間社のある場所は旧荒川の切れ処だといわれている。洪水時に土手が崩れ、深い窪みができて、これが池の元になり、えぐられた土砂が堆積して浅間社を祀る丘の元になったといわれている。

大沢の七つ池と河川跡


大里村
越谷ダルマ
大林砂丘
大林の桃山
大林村
古道
大房薬師堂跡
越谷御猟場
大林のホタル
元荒川
稲荷神社
大房村
は川筋の移動
香取神社
新道
浄光寺
光明院
天神前橋
照光院
今はなき浅間社
弘福院
大沢宿
桃
大房砂丘
大沢砂丘
葛西用水(逆川)
しじみ池
嘉右衛門池
観音坊池
八郎兵衛池
浅間池
外池
内池
久伊豆神社
天嶽寺
旧荒川
新川
古道
土手道

5 市内、西新井の「椿割り塚」の由来

田村のぶ子

この椿割塚は、かつては敷地が一五〇〇〇平方米(約一町五反歩)もあった旧名主斎藤家の屋敷内にあった。徳川初代将軍家康以前から続いてきた名家も、時代の流れに逆らえず、大正の末についに十三代で絶家となった。大正十年（一九二一）前後、田村與三郎の所有となる。昭和の初め頃から始まった耕地整理事業に依って、現在の土合六九二番地に移設された。その墓碑の大きさは、縦八十糎、横幅二十五糎である。正面には、

「天正十八庚寅天（かのえとらどし）　太田下野守（しもつけのかみ）室
　正雲院殿華嶽周宝大信女
　六月十日」

と刻まれ、太田下野守室とは、岩槻城主太田氏房の内室と伝えられて来た。

平成十八(二〇〇六)年六月に、太田下野守室四百十六年回忌を記念して、田村與三郎の子、夫精之の意志を受け継き、「椿割塚」の記念施設が完成した。

当地の西新井村は、今から凡そ四百年前、織田・豊臣時代においては、岩槻城の支配下にあった。

当時の岩槻城主は、太田十郎氏房である。氏房は、小田原城主北条氏政の次男として生まれ、天正十三年（一五八五）に岩槻城主の第八代を継いだのである。

豊臣秀吉は、天正十八年に天下統一のため、当時、関東一の勢力を持つ小田原の北条氏政の攻略に向かった。そこで岩槻城主である太田十郎氏房は実父の北条氏政に味方して秀吉の攻めに応戦した。その頃、太田氏房の内室は、夫の戦勝祈願に城下の野島にある野島山浄山寺（野島の地蔵尊）に参詣に行った。ところが、地蔵尊の両眼から溢れ落ちる涙を見て、夫の戦いがすでに勝ち目が無いことを悟り、嘆き悲しみのあまり、浄山寺前の「浄庵沼」に身を投げた。その時、嫡男の「岩月丸」五歳を配下の西新井村の名主斎藤光高に預けて、後のことを託した。浄庵沼に身を投じた内室の遺骸は、沼から流れ出る浄庵堀を下って、ここ西新井村の斎藤家の西脇に流れ着いた。斎藤家では、遺骸を引き揚げ、ねんごろに弔った。椿を墓標としていたため、今日に至るまで「椿割り塚」といわれている。

なお岩月丸は、後に斎藤家二代目を引き継ぐことになる。

※故人田村精之の原稿をもとに作成しました。

※太田下野守とは、岩井茂氏及び中村守氏の研究成果をもとに考察すると、岩槻城主太田資頼の家臣の初代高築次郎左衛門の孫で、太田下野守康宗をさし、後に岩槻城主太田十郎氏房をあてたとなります。

6　越谷吾山と越谷の方言

増岡　武司

人の話す言葉には、その地域によって独特の言葉がある。

わが国で、地方地方での言葉の違いを自覚し、その区域を明確に意識して記録した最古のものに、十世紀初めに成立したと思われる「東大寺諷誦文稿」がある。

日本全国の方言を大量に採集し分類したものに、越谷吾山の「物類称呼」がある。これは江戸時代の最大で最高の全国方言辞典といえ、二十世紀の戦前まで一人の手になるこうした全国的規模の方言辞典は存在しなかった。

越谷吾山は、享保二年（一七一七）、越ケ谷新町の会田家で生まれ、若いときから江戸などの文人と交流して、俳諧（俳句）に精進し、後に江戸へ出て芸道上の高い位である「法橋」に推選され、さらに安永四年（一七七五）には全国の方言を調べあげてまとめたものが「物類称呼」である。

さて、越ケ谷の方言だが、昔、日光・奥州街道の宿場町で、江戸と東北地方との交通路にあたっていたので、旅人を介して越ケ谷言葉が生まれたようである。今では他地域からの流入による急速な人口増で、標準語化し、いわゆる「越ケ谷弁」が急速に消えようとしている。

その中にあって山崎善司氏（故人・元越谷市郷土研究会理事）が越谷周辺の方言と訛りを熱心に調べられ、それを「越ケ谷言葉・方言と訛集」として発表しておられる。その言葉の数は一六五〇語にも及ぶ大作である。

また、増林地区コミュニティ推進協議会の方々が、地元の古老から聞き取り調査をしてまとめた増林の地元の方言には次のようなものがある。

☆「べぇ」の付く言葉《確認に使う》

・あれんべぇ（あれだけ）
・いっちゃうべぇ（いってしまおう）
・いいべぇ（よいでしょう）
・きたべぇなのに（来たばかりなのに）
・そうだんべぇ（そうでしょう）
・やっちゃうべぇ（やってしまおう）
・やだべぇ（やだ）
・いなべぇ（だれもいない）
・けっちゃうべぇ（帰る）
・くっちゃったべぇ（食べる）

☆「ぇ」が入る言葉

・けえぇる（帰る）
・かまねぇ（かまわない）
・なんねぇ（ならない）
・おさまんねぇ（つかまらない）
・しょうねぇ（しかたない）

☆「っ」が入る言葉

・おっとばす（追い飛ばす）
・おっことす（落とす）
・おっぱなす（離す）
・おっぺす（押す）
・くれっから（上げるから）
・こりきっちゃう（困ってしまう）
・さっぽる（投げる）
・したっけ（したかしら）
・しっつるって（ぶらさげて）
・そろっと（そっと）
・とっけっこ（物を交換する）
・ひゃっこい（冷たい）
・ぶっとばす（急いでいる）
・めっける（見つける）
・よっかかる（寄り掛かる）
・とっとけよ（貰っておきな）

（増林の地元の方言、
いわゆる『増林弁』の続き）

☆挨拶ことば

・いいあんべぇだねぇ（天気の良い日の挨拶）
・じつじゃぁねぇけど（話のはじめにいう）
・やんばいですね（良い天気ですね）

次に、故・山崎善司氏著書「越ケ谷言葉・方言と訛集」より、いわゆる『越ケ谷弁』の一部を紹介する。

○越ケ谷の方言例（カッコ内は意味）

・あいけんちぃ（じゃんけんぽん）
・あたす（思うようにならず、悪さをする）
・いら（たくさん）
・うかしんぼ（釣りの浮き）
・うそっき（真剣ではない）
・おいねぇ（だめです）
・おかまさま（ヒキガエル）
・おこさま（蚕＝かいこ）
・おこもさん（こじき）
・おっきる（引きすぎる）
・おっぱるねぇ（頑張ってるね）
・カガメッチョ（トカゲ）
・かくらん（日射病）
・かせる（伝染する）
・がっこっこ（小学校の生徒）
・きごる（筋が突っ張る）
・くじる（指先でかき回す）
・こそっぺぇ（心からなじめない）
・さくい（気がおけない）
・さしこみ（夢中になる）
・さっぽる（投げる）
・ざらっぺぇ（だらしなく金を使う人）
・しわんぼう（けち）
・すっぺりめし（おかずのないご飯）
・せな（長男）
・ちゃりいれる（横から口をはさむ）
・ちょこべ（傘が逆さに開く）
・つっきりみち（いつも通る近道）
・とんきち（間抜け者）
・なすかんなぁ（借りたものを返す）
・ねずみいらず（食器戸棚）
・はま（車の輪）
・ぶく（喪）
・やてばたてば（今すぐ急に）
・らちゃくちゃねぇ（整理がつかぬ）
・らんげえる（たいそうなもてなし）

以下省略

7 日光街道に鉄道馬車が走った

三浦栄市

千住馬車鉄道が、東京府南足立郡千住北宿の茶釜橋より埼玉県南埼玉郡越ケ谷町まで開通したのは、明治二十六年（一八九三）二月七日である。距離は約十哩（マイル）、運賃は十五銭で、一哩（一六〇九米）に付き、一銭五厘となる。同年六月一日に粕壁町寺町の最勝院まで延長した。距離は約十七哩、運賃二十三銭である。明治二十九年四月十五日に運賃が改正され、運賃が二十九銭と値上がり、一哩に付き一銭七厘となる。

普通に騎乗した時の馬の速力は、常歩（なみあし）で一分間に百米、速歩（はやあし）で二百米である。馬を故障なく使うには、五分間速歩で進み、十分間常歩で進み、合わせて十五分間で二千米進む。或いは、五分速歩、五分常歩で、合わせて十分間で千五百米進む。これが標準の乗り方である。

鉄道馬車においては、この単独騎乗とほぼ同じ速度で、乗合馬車と比べると倍近くの速さである。茶釜橋・最勝院間の乗客を乗せる時間を含めた所要時間は三時間三十分であった。

草加・越ケ谷・大沢・粕壁の町中の混雑時は、馭者（ぎょしゃ）が降りて、歩いて馬を先導したと思われる。越ケ谷では、二人の死者を出していた。沿線の評判はよいものではなかった。

千住馬車鉄道の鉄道馬車は、明治二十六年二月七日より免許取り消しになった三十年七月二十七日までの四年六カ月間を走り、次に引き継いだ、草加馬車鉄道の鉄道馬車は、明治三十一年十一月三日より、免許取り消しになった明治三十三年二月二十四日の一年四カ月間走る。鉄道馬車は合計五年十カ月間走って、日光街道から消えたのである。

※主な参考文献は、草加市史研究第九号「草加を走る馬車鉄道」（著者は、草加市史編纂委員長、故鈴木平八郎氏）
他には、春日部市史別冊「千住馬車鉄道」、春日部市主催「千住馬車鉄道展」（期間は平成十五年七月十九日から九月七日）のパンフレット

《鉄道馬車の思い出》

大沢地蔵橋　草取りの後の茶飲み話

お袋と妹二人が疎開していた大沢地蔵橋の農家のご隠居さんで当時七十歳近くの老婦人（昭和二十一年七月、田んぼの草取りの後）。まだ足腰も達者で野良仕事もする。猫の手も借りたいこの時期、義理で手伝う私や妹たちを指導しながらひよとり（日雇い）の若い娘達を冗談混じりで叱り飛ばす。地蔵堂の前にむしろを敷き、逆川の川風を受けながらの昔話、又始まったよ、ばあちゃんの話と。これが潮時とばかり、一人去り、二人去り、話の聞き手は俺一人。

「目の前の野田街道と天嶽寺の間の田んぼは深い。それは昔、川だったから。野田街道は猿島道、大沢橋の橋替えの時は寺橋を渡り、久伊豆神社と天嶽寺この地蔵堂のこの道を通り、地蔵橋を渡ると逆川沿いを茶畑へ。そこから日光街道に出るこの道は吉川から先、千葉の人達の間道だったわけ。私も父親から聞いたこと、家の者は聞き流しだがね。身近なこの辺りのことだけでも伝えて行かないとね。嫁入り前、両親と三人で東京見物、大沢橋下宿の福井さんの前、野田街道の突き当たりから鉄道馬車に乗り、千住茶釜橋へ。馬車を降りると人力車に母親と私が相乗り。千住の町中はすごい混雑、人力車は時々立ち往生。千住大橋の上で隅田川の川風にほっと一息つき。三の輪から日本堤山谷堀で父親がここが有名な料理屋の八百松だと。店先に人力車が一〇台以上並んでいる。待乳聖天様の小高い丘が左に、その先右手に観音様の五重塔、お参りしてから伝法院前、天ぷら屋で昼食。その天ぷらの旨いこと、ここだけの話だけど越谷大沢では食べられない。（伝法院通りに大黒と中津がある）帰りは東京の馬車鉄道で上野へ、日本鉄道ステーションと汽車を見て人力車で千住へ。道が狭くてひどい道、一里足らずの道のりだけど若い私が疲れたから両親（ふたおや）もぐったり。東京の馬車鉄道は二十四人乗り、丁度倍の広さ。馬車もきれいで二頭立。馬車賃は一人二銭、私が払ったから覚えている。千住の町は一日中混んでいる。三つの街道がここに集まっていること、後で人に聞いて知りましたよ。茶釜の発着所で小一時間待たされ、座席は一杯、若い男が二人車掌のところで立っている。本当はいけないらしい。草加の町に入ったら道が混んでいる。十五日、六斎市、五と十の日、六日市日。馭者は馬車から降りて歩き出す。松原でやっと人並みが途絶えてね。大沢橋も祭りの人出で渡れず、中町裁判所前で下ろされてしまい、観音横丁から柳原の土手を通って寺橋を渡り、帰り着く。母親は人力車で一足先に。鉄道馬車は疲れないが人力車は駄目。話の種に一回だけ乗ったけど。東武電車も一番乗り。越谷駅から、そう、今の武州大沢駅、まだ千住駅が終点でね。若いときのことは覚えているけど、この年になるとお昼のおかずもねえ、忘れるよ。農家でも腹一杯飯も食えない。三度三度味噌汁と大根の古漬け、闇で買う魚は鯛かサンマの開き、玉子だって三日に一回。町場の皆さんから見ればいいけどね。忘れているんじゃないね。同じものの繰り返し、だから記憶に残らない。いつになったら浅草の旨い天ぷら、食べられるかね」

草取りの後の茶飲み話、六十年経った今は田んぼも畑も工場に住宅地。お孫さんも六十七八になる。あの時、小学一年か二年の女の子、俺のことなど記憶にない。去年から馬車鉄道のこと、調べてみてこの時のご隠居さんの話、間違いなし。俺も今、記憶していることは書き残そう、出来るだけ。恥も罪も一切合切。

文・三浦栄市

8 増林の横井堀・掘削残土採集記

飛鳥・平安から中世・近世に至る遺物

山本泰秀

増林のふれあい橋そばの神明社前には、東西方向に横井堀が流れている。源流は逆川（さかさがわ）で、源八酒店（現、セブンイレブン）の横から始まり、北から南へ増林小学校の横を流れ、下前（しもまえ）の地境にぶつかり、東に直角に進んで古利根川に流れ着く。下前の地境には、越谷駅から北東に進み、古利根川を渡り、松伏町に通ずる直線の道路（市立病院、総合公園、体育館を通り抜く駅前中央線と呼ばれる）が建設されようとしていた一部にかかっていた。平成七年三月に、ふれあい橋附帯工事として下前との地境を流れる横井堀樋管埋設工事が行われた。この時、横井堀掘削残土は、増林小学校西門の雑種地に一時期保管されていた。そこで私は工事業者の許可を得て、三月十三日から残土保管期間の三月いっぱい遺物探しを行った。

掘り上げられた土は、粘土が混ざり合っていて、出土した遺物の分別に大変苦労したのである。七世紀前半の飛鳥時代の長甕の口縁部、九世紀の平安時代の順恵器の小皿、中世の灰袖の小皿等々が発見された。

これまでに私が増林で発見してきた遺物は、縄文、弥生、古墳期に限られていた。今回の遺物調査では、飛鳥、平安、中世の時期にこの増林の地に人々が住んでいたと思われる痕跡が発見され、今から数えて六〇〇〇年前から増林の地に人々が住み着き生活を始め、我々の祖先が今日まで延々と営み続けてきたことがわかった。

遠い昔の先人が残した断片的遺物によって、人類の歩みきたるその時代、その時代に生まれ育まれた文化の一端をつかむことができたといえる。

尚、今回発見した遺物の数々も、埼玉県埋蔵文化財調査事業団資料部長の高橋一夫氏（現、埼玉県立歴史と民俗の博物館館長）に依頼して、平成十二年七月十五日に鑑定していただいている。

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会とは

（平成１８年１０月現在）

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和４０年(1965)３月に発足し、平成１６年にＮＰＯ法人になりました。
現在は会員数が３００名を越える大所帯です。
ほぼ毎月行われる史跡めぐりは３５８回を数えるまでになりました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成１７年８月２７日（土）　郷土研究会創立４０周年・ＮＰＯ化１周年記念歴史講演会「江戸時代の越谷に学ぶ」
（講演者は江戸東京博物館館長・竹内誠氏、後援は越谷市教育委員会、文化連盟）
平成１７年　９月　６日（火）上野公園散策（国立博物館、東照宮、岩崎邸）
平成１７年１０月２３日（日）つくばエクスプレスで宇宙に行こう
平成１７年１１月１１日（金）バス史跡巡り（紅葉狩り：渡良瀬・高津戸峡・富弘美術館・足尾銅山）
平成１７年１１月１４日（月）大間野・旧中村家住宅開館１周年記念イベント
（みちくさ散歩、昔遊び選手権大会、「大間野周辺の昔」お話会、主催は本会と越谷市教育委員会）
平成１７年１２月　２日（金）大間野町・旧中村家住宅見学会
平成１８年　１月　３日（火）恒例の七福神（亀戸）と亀戸天神初詣で
平成１８年　１月２９日（日）研究発表会「越谷名物・太郎兵衛もち」
平成１８年　２月１１日（土）日本橋周辺散策と三井記念美術館
平成１８年２月１４日～２６日 越谷市立図書館での「明治・大正の越谷」展
平成１８年　３月　５日（日）蝋梅と梅の宝登山・長瀞火祭り
平成１８年　３月１８日（土）春のお彼岸・越谷六阿弥陀めぐり
平成１８年　３月２５日（土）講演会「御殿・鷹狩と徳川家康」（越谷市教育委員会との共催）
平成１８年　４月１８日（火）埼玉鴨場見学
平成１８年　４月２６日（水）バス史跡巡り・千葉の御殿跡と加曽利貝塚など
平成１８年　５月　９日（火）バス史跡巡り・金山城、高山彦九郎と呑龍様
平成１８年　６月１４日（水）本土寺と小金宿界隈
平成１８年　７月２２日（土）中川船番所資料館、荒川ロックゲート
平成１８年　８月２６日（土）見田方遺跡発掘４０周年記念講演会（主催は本会と教育委員会）
平成１８年　９月３０日（土）鹿沼！絢爛の彫刻屋台と川上澄生美術館
平成１８年１０月　９日（月）大間野・旧中村家のイベント（当会と越谷市教育委員会の共催）
昔懐かし「とうかんやのわらでっぽう」
平成１８年１０月２８日（日）今も残る田園風景「野島・三野宮」を訪ねる

◎郷土研究会ニュース「りせ」の発行

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行（Ｂ５版、百十～百五十頁程度）及び無料配布
内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動や、子供を対象に「埼玉古墳たんけん隊」「越谷歴史たんけん隊」なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間２千円（４月～翌年３月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。
または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0041　越谷市　千間台西　２－１７－１６　宮川 進 方
ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会
☎０４８－９７５－９１３９

◎「夢空感」にスペース借用し、事務所を新設、情報発信の拠点に！

このたび、念願の事務所をかねた情報発信拠点を、チャレンジショップ「夢空感」内のスペースに置かせていただくことになりました。

旧日光街道の北越谷（大沢）へ向かって右側、河内屋旅館さんの北側です。「いつか自分のお店を持ちたい」という方々のチャレンジのための空間です。そこにチョット異業種の、当会が入らせていただきました。

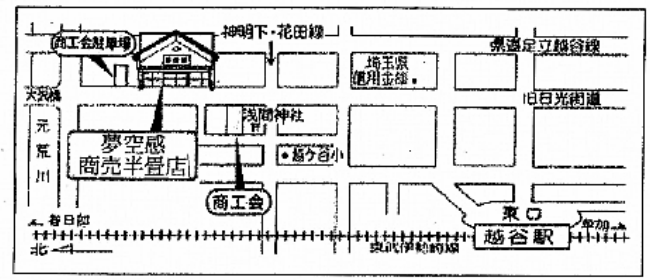
越谷特産のダルマ、桐箱、煎餅、太郎兵衛糯（もち）製のアラレのご紹介などを含めた、あらゆる意味での「越谷情報」を今後、発信していきたいと考えています。その他に、皆様が旧日光街道沿いの商店街へお出かけの際に「憩いの場、お休み場」としても、お使いいただきたいと思っています。是非、お気軽にお立ち寄りください。

「夢空感」は、月曜日は定休です。営業時間は午前１０時から午後６時（ただし当会は５時）までです。住所と当会の電話番号は下記のとおりです。

住所　343-0818 越ケ谷本町８－３　電話及び FAX ０４８－９６２－２６５１

また、金曜日の朝は、市内の農業者の方の直売市（いち）が開かれています。新鮮な季節の野菜などが安く手にはいることで評判です。金曜朝を目指して、夢空感にお越しいただき、郷土研究会で一休みするのも名案です。

（以上、Ｈ１７・１２・１７のＮｏ．５４「りせ」より、一部手直しして紹介）



○越谷市保存民家・大間野町・旧中村家でのイベント展開について

市民の方々に「文化財・旧中村家」に親しんでいただこうと、今年度、次のようなイベントを行なう計画をもっております。楽しい催しにしたいと思っておりますので、ぜひ、ご参加くださいますよう、お願い申上げます。

○5 月 24 日（水）「江戸あねさま人形」教室　講師・宮内和代氏
○6 月 6 日（火）老人福祉施設「ゆりのき荘」歴史散歩
案内・藤川吉洋幹事
○7 月 29 日（土）「トールペインティング」教室　講師・黒澤利恵子氏
○10 月 9 日（祝）「とうかんやのわら鉄砲」　講師・金岡由紀子氏
○11 月 14 日（火＝県民の日）
開館 2 周年記念イベント「昔あそびとこども達のための見田方遺跡発掘 40 周年記念のお話会」　お話・高崎力常任理事

H18.6.25　NO.64　「りせ」より